

イリイチの思想と公共訓練(2)

埼玉県立川越高等技術専門学校飯能分校

戸引 一則

6. 脱学校の社会

「脱学校の社会」が発表されたのは1971年のことである(原題は「DESCHOOLING SOCIETY」)。学校のような制度は廃止すべしとするラディカルな内容は、今でもなお刺激的である。低成長時代に入り、そして学歴デフレの社会になると、入学することあるいは卒業することが目的ではなくなる。イリイチが危惧した学校のあり方は、少しは好転しているであろうか。イリイチは、過程と目的の区別を曖昧にし、手をかけるほど良い結果が得られるとか、段階的に増やせばいつか成功するといった新しい論理を学校が生みだしていると指摘した。そして進級することが教育を受けたことに、免状をもらえば能力があることと取り違えるようになり、想像力も「学校化」されて制度によるサービスを受け入れ、そして望むようになることを恐れたのである。非物質的な欲求が物質的なものへの需要に変質させられるならば、すなわち健康、教育、輸送、福祉、心理的治療などの価値が、制度からのサービスを受けた結果として得られると思うようになるなら、破壊の過程は促進されることになる。イリイチは、従来の単純に経済的な意味での貧困を「古典的貧困」と呼び、制度に依存することにより自らの成し遂げる能力を失わされた状態を「近代化された貧困」と呼んだ。公共訓練は「近代化された貧困」から人々を救うものでなければならない。雇用保険制度にしても、ワンストップ・センターやキャリアアップ・センターなどの新しい就職支援機関にしても、用いられ方によっては近代化された貧困をつくり出してしまう。公共の制度には破壊性があることを認識しておく必要がある。

イリイチは、学校は人々に現状のままの社会が必

要だと信じ込ませる宣伝機関であると批判したが、シューマッハのいう経済援助の原則同様、必要を感じることが学習の前提であり、人為的に必要性を生じさせることは欲求不満と無力感を生むばかりである。価値は需要と供給のバランスにより決定されるのであり、制度によって生み出されるものであってはならない。学校における疎外は、意識されずに人間性を破壊する点において、経済における疎外よりもさらに弊害が大きい。高速道路は機動性に対する欲望と必要を自家用車への需要に転換した結果つくられ、学校は人々の成長し学習しようとする自然な傾向を教授されることに対する需要に転換するとイリイチは言う。他人によって成長させてもらおうとすることは、製造された商品を求めることよりも、さらに自発的活動の意欲を放棄させる。学校は全面的保護収容所と同様、人々に自らの力で成長することに対する責任を放棄させるものであるとしてイリイチは厳しく批判したのである。

いったん人々の知的水準を定義したり計ったりする機関の権威を受け入れると、他の機関の権威も容易に受け入れるようになる。学校で身に付けた知識の蓄積の価値を信じ込むのと同じように、高速度が時間を節約すると信じ、所得水準が良い暮らしの意味を決めると信じるようになる。さらに物質の供給が過剰になれば、製品の生産よりもむしろ多くのサービスの生産のほうが生活の質を高めると錯覚するようになるとイリイチは予測していた。知識経営の時代になったといわれ、ハードウェアよりもサービスなど目に見えない要素によって商品の価値が決まるようになってきた。価値を生み出すのは必ずしも工場やハードではなくなり、製品を媒介にしたソリューション(専門的問題解決)、サービス、情

報提供などに移行しており、この変化は業種・業界を問わないといわれる。このように企業の質が問われ、知識経営が新しい企業の方針としてもはやされる時代が来ることを、そしてそのような時代になっても、人間性の疎外という生産制度がもつ根源的な問題は、いっこうに解消されないであろうことをイリイチは予測していたのである。

7. 製作と行為

ものづくりにおける公共性の1つに生産倫理の問題がある。アリストテレスが理想としたように、公共領域なくして徳性の発達はありません。職業訓練は単に技能・技術を身に付ける場ではなく、ものづくりを通して徳性を身に付ける場でありたい。公共性というコンセプトは、「私」を「公」に従属させるハイデガーがいうような個性を失った人（ダス・マン）の集合体を意味するものではなく、他者とのコミュニケーションのなかで、個人の自己実現や尊厳が発揮されることと密接な関係があると山脇氏と言う。イリイチは、科学技術の発達とともに失われていく土地の暮らしに根ざした固有の活動の必要性を説いたが、それは効率を優先することによって人間生活の自律と自存の基盤（サブシステム）が破壊され、その過程で希薄になっていく人間関係を憂いたからにはほかならない。レヴィ＝ストロースがいうように、人間は関係性を求める存在であり、交換すること自体が価値そのものなのである。プラグマティズムを推し進め、効率のつくり出した関係性によって人々を縛ることは、徳性を含む人間性を喪失させていく。流通とメディアが発達した現代社会では、どこで暮らしていても同じ情報や物が手に入るようになった。生まれたときからずっと同じところで暮らし、狭い地域で限られた仲間とそこそこ楽しく暮らせばよいと考える若者が増えてきているという。これら若者の意識の変化を批判する向きも多いが、サブシステムを守ることを主張し、情報ネットワークをコンヴィヴィアリティのための道具としてとらえたイリイチにとっては当然の結果であり、肯定すべき変化なのであろう。

近代的な科学技術は、「製作」を機械化することに

より人間の「行為」のための潜在的な時間を増加させ、そうして人は生活必需品を製作することに時間をとられることはなくなった。失業は近代化の結果であるとイリイチは言う。アリストテレスは、「製作」が目的をもって行われるのに対して「行為」はそれ自身が目的で、その完成された姿は「芸術」と「徳」であると考えたが、これとは反対に物を作ることや働くということ自体が徳のあることで、何もしないでいることは悪だと信じている人にとっては、失業は悲しむべき怠惰なことになる。石田梅岩の石門心学に代表される日本人的メンタリティからいえば、失業は罪悪であるということになるだろうが、イリイチはそれが真理であるとは考えない。ウェーバーによれば、余暇は人々が働けるようになるために必要であり、アリストテレスにとっての労働は余暇を持つため、すなわち徳を積むために必要なのである。しかし悲しい失業と楽しい余暇の選択が、脱工業化時代の人類にとっては避けられないとしても、いずれの場合もその時間を過ごすことが商品の消費需要やサービスの生産需要を高めてしまう。前者は生産と消費のサイクルを繰り返しながらより多くの物質を供給する経済の制度を意味し、後者は有徳な行為までもサービスを提供することによってつくりだそうとする無駄な努力を生む。この無駄な努力をしているうちに、人々は学校による教育だけを教育と誤解し、医療サービスを健康と、スピードのあることを効果的な移動と混同するようになる。これらの誤解や混同が、開発という名でまかり通っているとイリイチは嘆いた。

経済学の中では労働として位置づけられてはいないが、人間生活のサブシステムとしてとらえる必要がある労働を、シャドウ・ワークあるいはヴァナキュラーな（その地の暮らしに根ざした固有の）活動と呼ぶ。サブシステムとしての労働では、生産と消費は明確に分離されてはいない。しかし産業化社会では、効率を上げるために生産と消費は分離され、その過程で人間性は疎外されてきた。そして現代は、科学技術のさらなる進歩によって人間性を疎外する労働さえもが不必要となり、人間性の回復だけではなく、いかににして人間の手に労働を取り戻

すかが問題になっているように思う。イリイチの思想は、人間性の疎外から人々を救うだけではなく、生産と消費の境界を曖昧にすることによって、人間の手に働くことの喜びを取り戻すことをも可能にするだろう。生産と消費の分離、すなわち経済の発展＝開発が商品を買うことを意味するようになると、商品なしで暮らすことができる条件が自然的・社会的・文化的な環境から消滅する。さらにイリイチの危惧は商品の生産だけにとどまらない。サービスについても限界を考えるべきであり、商品の氾濫と同様サービスに対する依存によっても人間性はさらに疎外されていくと考える。能力開発においても、消費者社会の弊害についての認識は不可欠である。

8. 技能センター

コミュニティーカレッジに相当する技能センターを設置し、どこの技能センターでも使用できる教育クレジットを与えるという構想を、イリイチはすでにもっていた。センターの技能教師に資格はいらない。技能教師の市場が開放されれば、技能を習得する機会は増大する。そしてセンターが機能するためには、ふさわしい指導者と学生、あるいは仲間同士を、意欲が高揚しているときに出会わせることが必要である。センターには、この機会を平等に与えるサービス網と出会いセットする能力が要求されることになる。

かつての教育は、時間を分け合ううえで、仕事とも、余暇とも競争することはなかったという。ほとんどすべての教育は複雑で生涯続くものであり、計画的なものであってはならない。学びたいときに学べる状態をつくり、そして指導員がカリキュラムとスタッフ（自らをも含む）をコーディネートできる体制がこれからの職業訓練には求められることになる。職業訓練を提供するプロバイダーの多様化は時代の要請であり、公共訓練が多分野提供型プロバイダーとして位置づけられるとすれば、公共訓練のコーディネート能力は益々重要になると考えられる。

デューイは「学校をより大きな社会の生活を反映するさまざまな仕事が発行される小社会にし、そしてそれを、芸術、歴史、および科学の精神で満たすこと」を望んだが、この特別につくられた隔離

地帯に子どもたちは閉じ込められてしまった。そして進歩主義と効率崇拜があいまって、子どもたちは学校によって産業機械に入れられる資源として加工される。既成の学校、教育工学者、およびフリースクールの三者での三つ巴の論争は、教育における革命の前兆だったわけではない。イリイチによれば、この論争は最終的には貴重な学習がすべて教職の専門家に教えられたことの結果であるかのように錯覚させるための1つの段階にすぎなかったのである。そしてこの錯覚は、社会が新しい世代の教育に責任を負わねばならないという感覚を植えつけることになる。このことは必然的に、だれかが他の人々の個人的な目的を設定し、分類し、評価してもよいことを意味する。しかしイリイチの理想とする学校では、シntax構造の効率よりも、意味論的（セマンティック）内容の価値のほうが重要になる。教えることを専門にできると証明された資格よりも、自分で選択した個人的出会いによる予期できない結果のほうに、より多くの価値を求める時代が来るとイリイチは考えていた。「何を学ぶべきか」という問いからではなく、「学習者は、学習するためにどのような種類の事物や人々に接することを望むのか」という問いから始めなければならない。優れた教育制度にあっては、学習者は意のままに人物および事物を利用することができる。イリイチが具体的に示す教育機関の意義は、そのまま公共訓練のオルタナティブの条件となるだろう。すなわち教育のための資源は、教育者の目標に従って分類されるのではなく、学習者の立場に立って、アプローチごとに次のように分類されることになる。

- ① 教育的事物等のための参考業務
- ② 技能交換（技能や奉仕の条件、連絡先などを登録する）
- ③ 仲間選び（コミュニケーションのためのネットワーク）
- ④ 広い意味での教育者のための参考業務

イリイチの目指す脱学校化社会では、学校という枠組み自体が明確ではない。脱学校化のためには、加工物や製造過程をだれにでも利用可能なものにする必要がある。これからの職業訓練には、指

導員1人ひとりに限定された能力によって自らのコピーをつくり上げていくことに拘ることなく、多様な技能者を育成すべくさまざまな情報・事物・ネットワークを多様なニーズに合わせて組み合わせて提供できる機能が求められていくことになる。そしてこれこそが能力開発市場における公共訓練の大きな特徴の1つとなるだろう。すなわち市場がプラグマティズムと競争原理によって活性化する以上、効率を上げるためには単純化せざるを得ず、生き残るためには情報を制御しなくてはならないのだから、多様性とネットワークには自ずと限界があるということである。

理想的な教育制度には、教育的交換・ネットワークを創造し操作する能力（運営）、ネットワークの利用の仕方について学生や両親を指導する能力（ガイダンス）、「同輩中の第一人者」として活動する能力（支援）という3つの教育的能力が求められるとイリイチは考えるが、この3つの能力は取りも直さずこれからの指導員に求められる能力となる。

9. おわりに

エミールに「最も有用な技術は、最も儲けの少ないものだ。労働者の数は人間の必要に比例しているし、すべての人に必要な労働は必ず貧乏人が支払うことのできる価格しかもたないからだ」と論ず部分がある。イリイチのヴァナキュラー・テクノロジーの意味もこの言葉の中にある。例えば高価な趣向品は、価格そのものが値打ちの一部をなす。豊かな時代になり、CSがものづくりの評価の基準になる時代となったともいわれるが、CSを重視することで必ずしも真のものづくりの価値が明らかになるわけではない。個人の価値観に判断を委ねる市場原理からのみ、ものづくりの真理を見いだすことはできない。ルソーは言う。「値段が高ければ高いほど価値がないとしたら、技術の本当の値打ちとももの正しい価値といったどのようなものであろうか。」そして「まず評価することを教えることだ。判断力を十分に鍛えなければならぬ」と結論するのであるが、これこそ職業訓練の最上位の目標となるであろう。

18世紀末の学校は、人々の要求を満たすよりは、

工業、国家その他の要求をずっと多く満たすようになっていたという。技能・技術が生活と分離して学ばれるべきではないとするベスタロッチの主張は、イリイチのヴァナキュラー・テクノロジーの思想に連なるものであろう。公共訓練としては、市場原理主義やプラグマティズムだけではなく、効率は悪くとも個性的に、そして徳性を育みながら社会システムを理解していく総合技術教育の理念を切り捨ててはならないのではないだろうか。

「コンヴィヴィアリティの道具」から30年後の現代は、IT時代となり、自立共生のための道具としてのインターネットを志向していたイリイチの理想が実現しているようにも思えるが、一方ではIT産業が市場原理主義により肥大化することで、根元的独占や人々の依存傾向は増大しているのではないだろうか。個人の内に自立共生の時代が始まっているという自覚がなければ、道具を使いこなすことはできない。科学技術の進歩によって生じた専門家への過剰信頼によって、自己決定能力は低下する。専門家という統制が人為的で信頼に値しないとすれば、さらに問題は深刻である。

広く分けもたれた知識と、それを活用する能力との結合は、自立共生的な道具が優先する社会の特徴である。公共訓練が技能習得の機会を開放するなら、自発的な学習の範囲は広がり、イリイチのいう完全な学習が伸展するだろう。あくまでも就職支援は「コンヴィヴィアリティのための道具」であるべきである。人為的な統制によって需要と供給のバランスに変更が加えられたことを知るべきであり、その認識から職業訓練はスタートすべきである。イリイチは言う。「学びたい」から「教育を受けたい」への変化は、行為するものから消費するものへの変化を示すものであると。

<参考文献>

- 1) I. イリイチ：「コンヴィヴィアリティのための道具」, p.1-15, p.86-90, 日本エディターズスクール出版部, 1989.
- 2) I. イリイチ：「脱学校の社会」, p.112-134, p.144-146, p.213-228, 東京創元社, 1977.
- 3) I. イリイチ：「シャドウ・ワーク」, p.1-9, p.37-72, 岩波現代選書, 1982.